

高松支部 活動報告

1 研究主題

「確かな学力を育むための
分かる授業の創造」
～メディア活用の目的を明確にした
授業づくり～

2 はじめに

中学校の授業においては、物理的・時間的な制約を受けることが多く、実物に触たり、直接体験をしたりすることが難しく、特に大規模校でその問題が指摘されることがある。そこで効果的な学習を行うための手段の一つとして、視聴覚教材、特に放送教材に注目し、高松地区のメディア教育部会で授業での活用方法について研究を進めた。

3 研究の概要

(1) 第1回主任研修会

(4月25日高松第一中学校)

- ① 昨年度の報告と今年度の計画
事業報告 会計報告
役員選出 事業計画
- ② 研究主題の決定
- ③ 研究組織の決定
- ④ 研究計画の決定

(2) 第2回主任研修会

(6月14日高松第一中学校)

- ① 研究主題と研究内容について
- ② デジタルカメラによる撮影及び
画像の編集についての研修
- ③ 授業でのメディア機器利用に関する
討議と情報交換

(4) 高松支部夏季研修会

(7月29日屋島中学校)

- ① プロジェクターを利用した電子黒板
の利用についての講習
- ② NHK放送コンテストについて
・審査の様子と優秀作品の紹介



【主任研修会の様子】

(5) 第3回主任研修会

(10月3日高松第一中学校)

- ① 講演「情報教育
ー今後生徒を取り巻く情報社会ー」
鳴門教育大学大学院 藤村雄一 教授
- ② 放送教育四国大会について

(6) 第4回主任研修会

(11月27日高松第一中学校)

- ① 電子黒板のプレゼンテーション
- ② メディアを利用した授業の実践報告

(7) 第5回主任研修会

(2月24日高松第一中学校)

- ① 25年度のまとめと反省
- ② 26年度の研究、研修についての
情報交換と計画案

4 研究の内容

(1) メディアを利用した授業の実践報告

芸術の授業で情報番組を使用する場合、鑑賞授業における人物紹介や歴史・文化的背景の解説に使う場合と、各分野の技法・制作プロセスの解説に使う場合が主な使用方法である。

今回、本校2年生でフォルム（形状）デザインを行うためのアプローチとデザイン・プロセス、平面から立体をイメージできるようトレーニングさせるにあたり、「ワイヤーフレーム法」の実習と「香りをイメージしたフォルム（形状）デザイン」を行うことにした。香りという無形のイメージをデザインするために「香水」の分野を取り上げ、香水と共に形態を成熟させてきた「香水瓶」についてデザインの参考となる知識を学んだ。

香水瓶の学習にはインターネットと映像資料を使うことにしたが、作品制作の生徒への意識付けと知識理解を得るために、授業導入部にNHKの教養番組「美の壺」を資料として視聴した。

授業内容である「香りをイメージできる瓶のデザイン」～イメージから抽象作品をつくろう～は、大人の世界に興味を持つ年頃の中学校2年生の女子生徒はともかくとして、男子生徒にとってはほとんど興味の湧かない世界であり、「香りを身につける」という感覚から教える必要があった。

また、感情・言葉などのイメージから形状デザインを行う授業は美術分野の定番であるが、少々趣向が性別によって偏るため、なにか総合的に香水瓶の世界を紹介する番組が無いか探っていて、最終的に当番組に行き着いた。

NHKの「美の壺」は、あらゆる美的観点を持ち現在芸術として一般的に認められている分野を取り上げた番組である。今回は第209回、18世紀アンティークから現在に至る「香水瓶」の美の要素についてまとめられたものを視聴した。

美の要素は毎回三つにまとめられ、初めてその世界を知る者にも非常にわかりやすい解説がされている。映像と画像の美しさは折り紙付きで、進行役の草刈正雄氏の落ち着いた演技も様々な芸術の世界によくマッチングしたパッケージングの質の高い番組である。

授業自体は完成まで13～15時間の計画で、「美の壺」は2時間目、作図と発想のトレーニングが終わった後に香水瓶の知識学習として視聴した。視聴後にアイデアスケッチを行い、紙粘土を配布して制作を開始した。この報告をまとめている2月上旬現在、授業では個人差のため粘土で成形～乾燥～切削成形まで進行している。今後着色を経て今月下旬には完成の予定である。

今回はメディア教育部会の研究目標を受け、当番組を視聴させることにより、全く知識を持たなかった生徒、作品制作に自信が持てなかった生徒に少しでも作品制作の方向性を示すことが、生徒の制作に対する姿勢に変容をもたらすのではないかと画策した。

結果、普段立体制作を苦手とする生徒が粘土などで制作するのは、既存のアニメキャラクターだったりふざけて品位に欠ける物だったりする。しかし今回の作業の中で現時点で見られる傾向としては、少なくとも何らかの容器の形状として判別できるような幾何形体を制作する生徒が増えている点である。香水瓶の華麗な造形を再現することは困難と考えている生徒でも、液体を入れる容器のフォルム（形状）を考え、立体制作しようとする姿勢が見て取れる。全くテーマから外れた立体を制作している生徒はならず、皆何らかの容器に見える作品が並んでいる。

この様な点を踏まえると、「美の壺」視聴を通して生徒の制作姿勢の変容を少なからず誘引するきっかけとなった点においては、映像メディア資料の活用によって学習効果の向上に一応の成果が見られたと判断できると捉えている。



成形 3 時間目の授業風景



成形の最初 1 時間は自由に粘土に触らせて遊ばせ、粘土の材質に手を馴染ませたが、作品としては非常に稚拙な物も多く、集中して制作したようなものにはならなかった。

「美の壺」視聴後の大多数の生徒は、少なくとも「容器」に見える形状のデザインに気を配るようになった。それによってデザインの質も向上し、最低限でもシャンプーボトルの様な幾何形を形作る生徒が増えた。技術的に困難な生徒もいたが、チャレンジする姿勢がまず大切なのは周知の事実である。

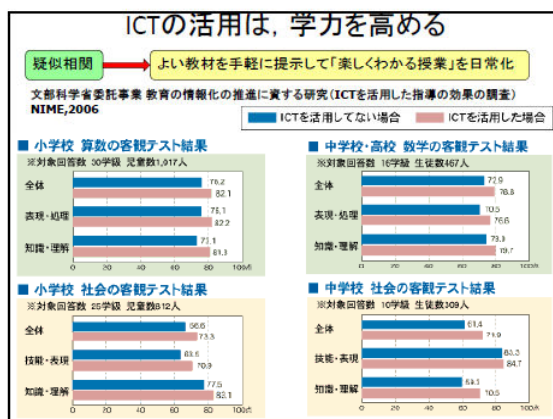


成形 5 時間目・乾燥中の作品
いずれの立体も丁寧に作られている。

(2) 講演「情報教育」

鳴門教育大学大学院准教授の藤村雄一氏をお招きして、高松第一中学校を会場にして「情報教育－今後生徒を取り巻く情報社会－」という演題で講演会を行った。

講演では、日本および香川県の ICT 環境と今後の国の施策について、ICT 教育の目的について、世界の教育現場での ICT 活用の現状についてのお話があった。豊富な資料を基に、わかりやすい講演内容であった。



5 今後の課題

本年度は 6 回の研修会の題材設定を各校の主任に分担して研修をすすめた。結果、教員の知識やスキル向上にはつながったものの一貫した研究とは呼べない状態であった。来年度は研究の軸をはっきりさせると共に、各校が様々な場面で情報機器を活用している場面の情報交換を多く行い、より効果的な情報機器の活用の在り方について研究を進めていきたい。